

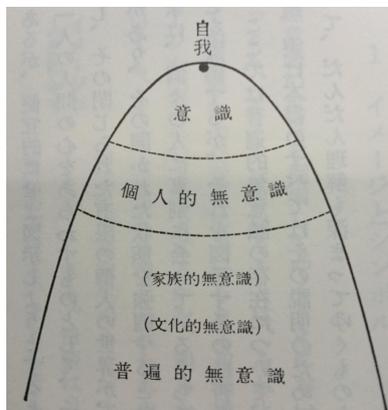
無意識の構造 ユングの心理学

心の層構造

ユングはフロイトと協調して精神分析学の確立のために努めたが、のちに彼らは異なる学説をたてることとなった。その理由はフロイトが神経症者の治療を主としていたのに対し、ユングが精神分裂病者に接することが多かったことがあげられる。ユングは多くの分裂病者に接しているうちに、彼らをフロイトが述べている理論ではどうしても理解できな
いと感じ始めたのである。分裂病者の述べる妄想や幻覚などの内容を、その人の幼児期における経験と関連するコンプレックスなどによって説明することは不可能なのである。

ユングは人間の無意識の層は、その個人の生活と関連している個人的無意識と、他の人間とも共通にもつ普遍的無意識とにわけて考えられるとしたのである。ただ、それはあまりにも深層に存在するので、普通人の通常的生活においては意識されることがほとんどないわけである。ユングは心を層構造にわけて考える。個人的無意識とされる層は、一度は意識されながら強弱が弱くなって忘れられたか、あるいは自我がその統合性を守るために抑制したもの、あるいは、意識に達するほどの強さを持っていないが、何らかの方法で心に残された感覚的な痕跡の内容から成り立っている。

普遍的無意識は、個人的に獲得されたものではなく、生来的なもので、人類一般に普遍的なものである。このように人類一般に共通のものに至るまでに、ある家族に特徴的な家族的無意識とか、ある文化圏に共通に存在する文化的無意識などを考えることもできる。ユングはこれらを総称して、普遍的無意識と呼んでいる。

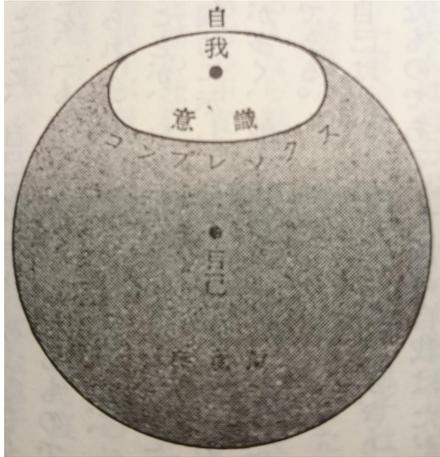


図はユングが考えた心の層構造である。図では下を開いた形にしているが、一人の人間の心を表すものとして、一応閉じた世界として円形で表す時もある。しかし、その閉じられた有限の個人の世界が、実は普遍的に人類一般に開かれているところに面白みがあり、その開かれた状態を強調するとなると図のようになるわけである。

無意識の構造 ユングの心理学

自己

西洋人の意識を重視する態度に対して、ユングは無意識も大切なものであることを強調し、その両者の相補的なはたらきに注目するとき、われわれは全人格の中心はもはや自我ではなく、自己であることを悟るであろうと述べている。彼はこのことを「自己は心の全体性であり、またその中心である。これは自我と一致するものではなく、大きい円を含むように、自我を包含する」と述べている。



人間の心を個人のそれは閉じたものとして考えると図のようになる。しかし、無意識の普遍性を考えると開いた形を描きたくなり上図のような形になる。後者の場合、自己はどこに位置するのかと考えることは面白い。それは万人共通の一点となるだろう。

ここに、自己のパラドックスがあるように思われる。かつて、ユングに対して、自己ということを、「もつと具体的に見えるもので、何なのか言ってほしい」

と迫ったとき、彼は「ここにおられるすべての人、皆さんが、私の自己です」と言ったという。このことは、自己実現ということが、いかに自分個人のことだけではなく、他の人々とのつながりを有するものであるかを端的に示している。現実には、他人との関係の改変や対決を迫られることが多く、他人と無関係に、自分だけの成長をはかることなどは不可能に近いことが実感されるのである。

自己はユングの定義に従う限り、あくまで無意識に存在していて、意識化することの不可能なものである。人間の自我はただ、自己のはたらきを意識化することが出来るだけである。このため、われわれは自己をそのシンボルを通じてのみ知ることが出来るのである。自己のシンボルの顕現は、人に深い感動を与え、それが宗教体験の基礎となると、ユングは述べている。そして、キリスト教におけるキリストや仏教における仏陀を、自己のシンボルとして見る事が出来る。